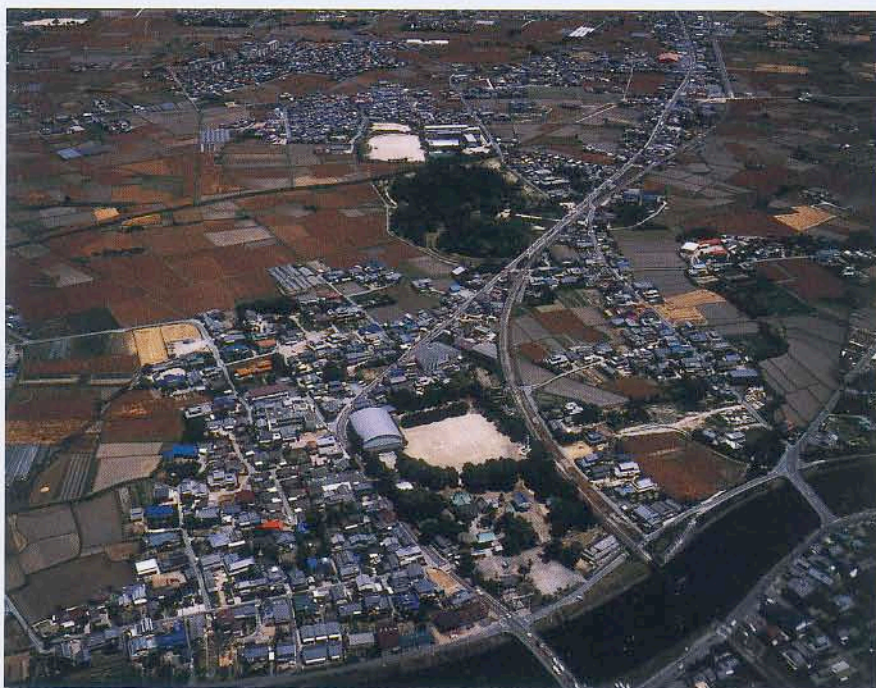


歴史散歩

れきしさんぽ°No.10

おんつか ごんげんつか しせき ひるば 御塚・権現塚史跡の広場

市内大善寺町に所在します国指定史跡、御塚・権現塚古墳の両古墳を含む約5万m²は、平成6年度に「御塚・権現塚史跡の広場」として整備され、市民の憩いの場及び古墳公園として多方面で活用されています。この公園は、久留米市が25年の期間と総事業費約5億5千万を懸けて本格的に整備した古墳公園です。



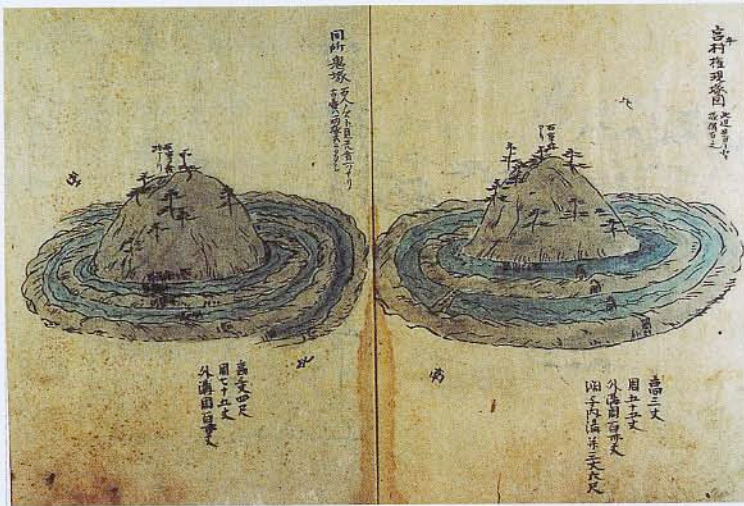
大善寺玉垂宮（前方）と御塚・権現塚古墳（後方）

学の分野でも多岐にわたりますが、中でも『筑後将士軍談』は筑後地方の総合的な歴史書として現在もその利用価値は高いものがあります。この書物の中に両古墳は「鬼塚」・「権現塚」として描かれ、実地踏査による測量値も併せて記述しています。「鬼塚」は「御塚古墳」のことであり、現状同様に三重の堀と堤（土居）が描かれ墳丘の墳頂部に石室を掘り出した跡があり、石人のかけらがあったことが記されています。一方、「権現塚古墳」は二重の堀と堤が描かれ、外堀に1か所陸橋が見られるのも現状の姿に良く似ています。その後、江戸末期から明治時代に至る半世紀の間、両古墳がどのような状況であったのか記録はありませんが、イロハ塚と呼ばれる古墳周辺は大正元年（1912）の耕地整理によって削平され、一部は造成されて現在のように耕地化が完全になされたことが考えられます。

大正2・6年には、筑後史談会の黒岩薫次郎や武藤直治、宮内省諸陵考証課長の増田千信らは現地調査を実施し、この古墳が古代当地方の豪族と考えられる「水沼の君」の墓だろうと推定しています。

◆御塚・権現塚古墳の変遷

御塚・権現塚古墳を初めて紹介したのは、江戸時代の終り久留米藩の藩士であった矢野一貞です。彼は寛政6年（1794）6月に久留米藩士早川平右衛門の次男として三猪郡京隈字小松原（現久留米市京町）に生まれ、文政10年（1827）34歳の時、矢野家の養子となり馬廻組矢野家を嗣いだ後、藩校明善堂素読方、御殿素読方、国学引立方、開物方加役奥通り等を歴任しています。彼は一方で地域文化の解明に力をそそぎ、多方面の分野で書物を著しています。考古



『筑後将士軍談』に描かれた御塚・権現塚古墳

これを耳にした当時の大川鉄道会社の社長であった深川忠吉は、由緒ある塚が荒廃のままであることを嘆き、大善寺村垣屋一成ら数人の私有地であった古墳及び隣接地の三町歩を巨額を投じて買収するとともに、その修復を計画し宮内省を通じて修復工事の監督を同省で全国の陵墓の修理に当たっていた梶田貞一に依頼しています。

梶田が古墳修復の参考とした資料は、前述の矢野一貞翁の測量絵図であったことが推定できます。それは、久留米市教育委員会が実施した発掘調査の結果と矢野が江戸時代に踏査した測量値が極めて近似していることから分かりました。この大正6年の大修復工事は、当時の写真から分かるように地元の有志による参加も得て大規模なものであったようで、古墳正面に鳥居、灯籠、玉垣等を建て拜所として整備しています。深川は大正の修復後、買収した土地すべてを大善寺財産区に古墳の管理を依頼して以来住民の手によって保存されてきました。その後、昭和6年には国の史跡に指定を受けました。

ところが、大戦後の戦災者や大陸からの引揚げ者の住宅用地として古墳周辺の土地が利用され、周濠の埋め戻し・周堤の削平等の工事が行われ、33年筑邦町への寄付の時点で古墳周辺には25戸の住宅建築がなされ古墳の姿が大きく変わりました。

昭和42年、筑邦町が久留米市に合併すると同時に、両古墳の管理を久留米市が引き継ぐことになりましたが、その有効活用を図るために、45年度より本格的な環境整備に着手することになりました。



矢野一貞翁肖像画 (篠山神社蔵)



大正修復に参加した大善寺村民有志



権現塚古墳外濠浚渫状況 (西側付近)

両古墳の復元のためには指定区域の拡大が必要であり、墓地改葬や民有地の一部買上げを行いながら、文化庁に追加指定を申請し、54年に告示され、現在の約5万m²の指定地が確定しました。

その後、家屋移転などの事業が進められ、58年度の民有地買上げをもって指定地のほぼ全域が公有地となりました。60年度から指定地全体の環境整備がスタートし、両古墳の復元と総合案内広場の修景整備などによって平成6年度「御塚・権現塚史跡の広場」として完成しました。

整備目標の一つであった両古墳の復元は、矢野一貞翁の測量値に基づいて行われた大正6年の修復工事の痕跡を参考として実施されているので、現在の古墳は江戸時代終り頃の姿と考えると良いと思います。

◆御塚・権現塚古墳の歴史的な位置付け

御塚・権現塚古墳は江戸時代終わりの矢野貞一翁の紹介以来、大正の修復以後も各方面の研究者によって論述されていますが、この両古墳を「水沼の君」一族の墓とする解釈には、現在もなお異論を唱える人はいません。

両古墳の発掘調査では、次のようなことが確認されました。

御塚古墳は全長約121mの三重の周濠・周堤が巡る帆立貝式（帆立）の前方後円墳で、主墳丘はすでに盗掘を受けていました。

権現塚古墳は二重の周濠・周堤が巡る直径152mの巨大な円墳で、外側に浅い溝状のようなくぼみが回っていることが考えられます。

内側の周堤には写真で示すような規格的に樹立されたと思われる円筒埴輪列が検出されています。内堤全周に埴輪が巡っていると仮定すれば、検出例から合計500個体ほどの埴輪が立てられたこととなります。市指定の人物埴輪は大正6年の修復時に出土したものです。

両古墳の築造年代は、出土した埴輪等から推定すると、御塚古墳が古く5世紀の後半に、権現塚古墳が6世紀前半から中頃の年代が考えられます。

古墳近くには銚子塚古墳と呼ばれる大きな前方後円墳が存在していたことが記録にありますが、近接して存在した3基の古墳が「水沼の君」一族の墓と考え、御塚古墳と権現塚古墳は2世代ほど違うので、この両古墳の間に銚子塚古墳を位置付けても良いかもしれません。



整備終了後の御塚・権現塚古墳 (平成6年)
「御塚・権現塚史跡の広場」



権現塚古墳内堤の埴輪出土状況



権現塚古墳出土の人物埴輪 (市指定文化財)



総合案内広場 (柳川県道より)

北部九州最大の豪族である「筑紫君」の存在が大きく、当地方の古墳文化に独特な影響を与えました。その勢力を最も強めたのが「磐井」の代と言えます。ハ女市に所在する岩戸山古墳は彼の墓と考えられ、九州最大級の前方後円墳です。そして、ある時期「筑紫君」一族の本拠地が東西に長いハ女丘陵にあったことが、岩戸山古墳を前後する有力古墳の存在で推定できます。

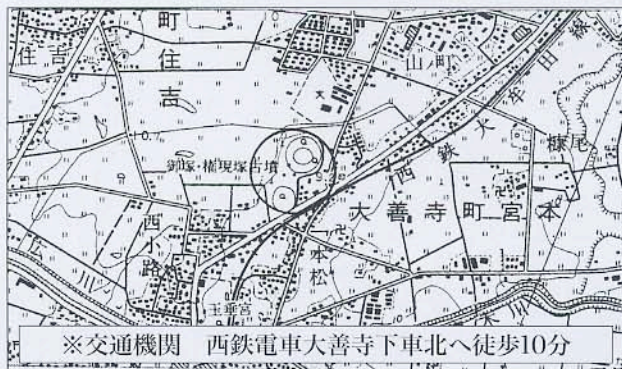
この磐井が全国統一を進めていたヤマト政権に謀反を起しました。北部九州の古墳時代最大の事件であった「筑紫君磐井の乱」(527年)がそうです。磐井は高良山の麓、御井町周辺での戦闘で斬られました。

ヤマト政権が目的とした九州平定の最も大きな理由は、中国大陸との交渉権を独占的に手



御塚・権現塚史跡の広場 (平成6年度)

に入れることでありました。玄界灘を利用した交渉ルートは最初から「宗像君」が国家的規模で担当させられていたことが沖ノ島の調査や宗像大社の資料等から確実です。一方、東シナ海から有明海に向かう交渉ルートの存在も考えられ、旧三猪郡周辺が重要な地域であったことが推定できます。「水沼の君」の本拠地は筑後川と有明海の接点で、(注1) 筑後地域の大陸交渉窓口部にあたります。この筑後川河口の拠点を押さえた有力者が「水沼の君」であり、「宗像君」同様に早くからヤマト政権と密接な関係があったことが考えられます。筑後川上流には最も早くからヤマト政権との関係が考えられる「的君」がいたことも、この地域が重要な役割を果たしていたことが言えます。しかも、最大の豪族であった磐井の死後も、やはり筑後川から有明海、そして東シナ海を利用した中国大陸との交渉ルートが存在していたことが、権現塚古墳の巨大な墳丘が証明しているようです。



※交通機関 西鉄電車大善寺下車北へ徒歩10分

※注1 当時の海岸線は現在よりも内陸部にあり、両古墳は河口に近接していたことが考えられます。

発行機関名	久留米市教育委員会
☎830-8520	久留米市城南町15-3
文化財保護課	0942-30-9225
久留米市埋蔵文化財センター	0942-34-4995
久留米文化財収蔵館	0942-38-6194